

IV-127

土木計画における景観的評価法の一考察 (その1)

○正会員 須田 清隆*¹ 同 池松 建治*²

1. 研究の目的

公共性の高い高速道路、エネルギー施設、大型橋梁等の土木施設において、規模の大きさや恒久性を考えた場合、社会的問題として環境評価が問われる現在では、これらの施設のもつ景観的評価が重要になってきている。しかし、ここで問われる“景観性”とは、決して土木施設をより特徴的に表現するというよりも、“自然環境や周辺環境”(総称として社会環境とする)に対して如何に景観的に影響を及ぼさないかを評価する方が多いのが現状である。

本研究の目的は、土木計画における景観評価事例を通して、景観上の評価指標を明らかにしていく事とそれらの指標に対する評価技術の効果を推し量り、これからの効果的な景観評価法の可能性を見極める事にある。

2. 検討内容

2-1. 景観性指標とその効果

景観の評価を決定する指標を社会環境における機能的要因と人間的要因に分類し、各要因がどのように景観性指標に影響しているかを公園計画や再開発計画などの実施事例を分析する事によって検討した。また、ここで示す機能的要因とは、経済活動・社会活動・文化活動等の人間社会の中で要求される社会インフラ、生活インフラの整備等の物理的社会環境要因であり、人間的要因とは、地域の文化・経済性・政治力・伝統技能・教育等に依存している精神的要因を意味している。

2-2. 公園計画

図1の公園計画は室蘭市測量山公園計画であり、公園利用に対し“安らぎ”や“くつろぎ”“雰囲気明るさ”を目的とした。この事例においては、自然に対するリアリティや周辺の自然との調和に不自然さが見られるが、反面人物の取り込みによって閑散としていた風景を活気ある雰囲気に向上させている。

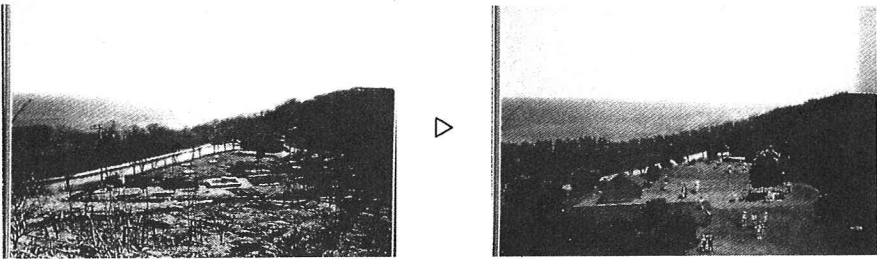


図1 公園計画 現況(左) 計画案(右)

2-3. 河川計画

図2の河川計画は、足立区掛川浄化計画であるが、地域住民の河川に対する親水性を高める事を目的とし、河川区域の保護を従来のコンクリートから自然な感じを受ける石積みとした。これによって人工的なイメージが解消されたが、一方では石垣のスケール感によるものか、石積みの崩壊による不安定感を感じさせた。

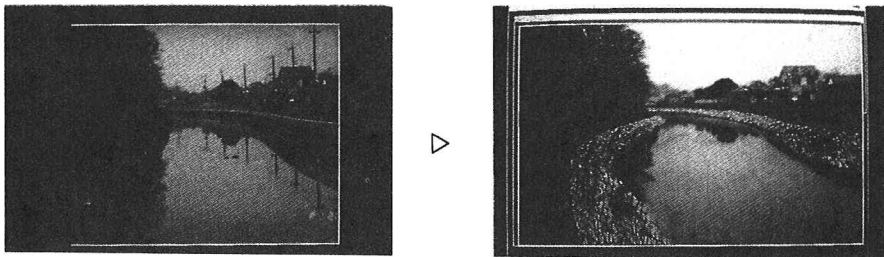


図2 河川計画 現況(左) 計画案(右)

2-4. エネルギー施設計画

図3の事例は、雪ダムによるエネルギー施設の計画である。ダムなどの大型構造物の建設では社会環境の破壊につながるとして話題にのぼるが、ここではそうしたエネルギー施設が社会環境に影響しないか確認する事を目的としている。この事例において、周辺自然のリアリティと施設の単純化により自然の中への構造物の違和感は感じられないが、それぞれのスケールの違いによるアンバランスは感じられる。

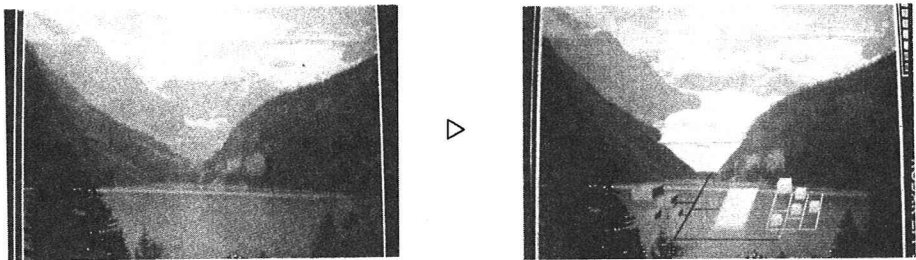


図3 エネルギー施設計画 現況（左） 計画案（右）

2-5. 再開発計画

図4の再開発計画は、小樽市の市民グループが計画している埠頭再開発計画の事例であり、再開発の機能性を重視したコンセプトづくり、イメージづくりを目的としたものである。本来シンボリックであるはずの建築建物が、周辺のリアリティと模型との不調和が建物のイメージを軽くさせ、その規模や重量感を分かりづらくさせている。

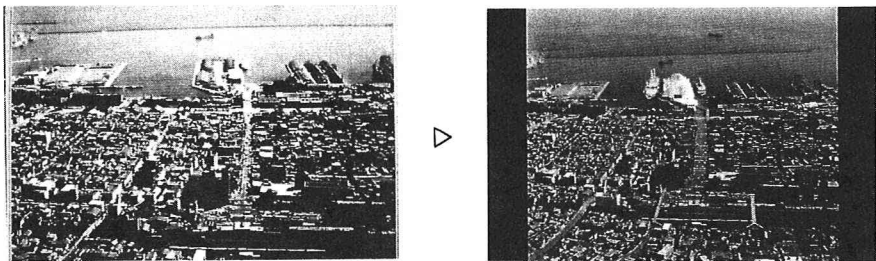


図4 再開発計画 現況（左） 計画案（右）

3. まとめ

以上の事例の景観的要因を評価した場合、それぞれに機能的要因と人間的要因の両要因を合わせ持っており、それらの占める割合によって計画の持つ意味合いが決定されている。例えば公園計画では自然や安らぎといった人間的要因が機能的要因より強調されるが、一方再開発事例では機能的要因が人間的要因より強調される事によって、その景観が効果的に評価される。表1に各事例での目的・対象・評価等をまとめた。今後、色彩やレイアウト、スケールなどのパラメータが景観の評価に対しどのような感度をもっているか層別に検討していく予定である。

表1 事例別評価

	依頼者	目 的	対 象	要求要因	景観性評価		
					人間的要因		機能的 要因
					主	従	
公園計画	市計画課	市民へのコンセンサス	老若男女（一般）	安らぎ	公園	自然	低い
河川計画	区計画課	区民への提案	老若男女（一般）	親水性	河川	水	低い
エネルギー施設計画	行政	環境保存	自然保護グループ	調和性	自然	雪 ダム	低い
再開発計画	市民グループ	コンセプト創り 問題提起	市民活動グループ 市の特定層	機能性	計画	周辺	高い

*1 (株)間組 技術本部 CAD技術室 室長代理 *2 同 研究員